プロトコル症候群

森野クマ

プロトコル症候群

　男が心療内科を受診する気になったのは、夫婦喧嘩の最中に発せられた妻の言葉が原因だった。喧嘩のきっかけは実に些細なことだった。男が料理をつくっている妻をさりげなく見た時だった。妻が目分量で塩やコショウを入れているのだ。それがどうしても我慢できず、思わず「ちゃんと計って入れろよ」と口に出してしまったのだ。
　妻からは私の経験と勘がそんなにも信じられないのと罵られた。普段から口うるさいだの、細かいことを気にしすぎだの、昔はこうじゃなかっただの言われ、挙句にあなたボケはじめたんじゃないのとまで言われ、男もついカッとなって反論してしまい、そのまま夫婦喧嘩モードへ突入。
　とはいえ、冷静に考えてみれば確かに昔は細かいことは気にしていなかったようにも思う。妻からは「大らかなところが好き」と言われて付き合い始めたほどだ。
　考えれば考えるほど、ますます自分がおかしくなっている気がしてきた。これは本当に、ボケがはじまったのかもしれない。そう考え、男は町の小さな心療内科に行くことにしたのだ。

「すみません、よく聞き取れなかったのでもう一度お願いします」
「ええ、あなたはいわゆる『プロトコル症候群』です」
「プロト……コル、ですか？」
　聞きなれない言葉に男は一瞬戸惑った。目の前にはカジュアルな服を着た医者が座っている。心療内科では患者を威圧しないように、白衣を着ずにあえてラフな格好をしている医者が多いそうだ。
「ほら、『シンデレラ症候群』とか聞いたことありませんか？　その程度の言葉です。深刻な病気だとかは思わないでください。まあ、流行語の一つくらいに思っていただければ」
　医者はやたらとニコニコしている。愛想笑いというよりも、職業柄こういう笑顔が自然と身に付くのだろう。
「ただ、その若干偏執的なところが私生活をおかしくすることは稀にあるんですよ」
「偏執的、ですか」
「プロトコル症候群のプロトコルとは『手順』を意味していて、つまり何でもマニュアルどおりじゃないと気が済まない人の症状のことなんです。なんでも教科書的に動こうとしますし、逆にそういった手順がはっきりとしていないものには不安を覚え、無理にでもマニュアルを作ろうとしてしまう。最近の日本人には結構多いみたいですよ」
「そうなんですか」
　言われてみるとたしかに、何でもマニュアルどおりにしか動けない人が多い気がする。自分が習ったことが全てであり、それ以外のイレギュラーなことに対処できない人間。ゆとりだとか受験戦争の弊害だとか言われていたが、なるほど、それにプロトコル症候群という名前を付けたわけか。
「料理は材料を正確に計ることよりも慣れの方が重要なのに、あなたは奥さんに正確さを求めて

しまった。もしそれを言うのなら、塩１グラム、砂糖１０グラムみたいに、料理本にきっちりとした整数が書かれてあることの方が変だとは思いませんか？」
　なるほど確かにその通りだ、と男はうなずいた。
「この症候群は何が原因で発症するのかはまだよくわかっていませんが、プロトコル症候群であることを自覚して、細かいことを気にしないようにしていれば、ひとまず日常生活に支障をきたすようなことはなくなるようです。イラッとしたときに、自分がプロトコル症候群なんだってことを、思い出してください」
　男は医者の言うこと一つ一つに納得した。自分はまさに、プロトコル症候群そのものだった。男は医者に礼をいい、診療所を出た。帰ったら今日聞かされたこの症状のことを妻と話し、これからのあり方を二人で考えようと、男は心に決めた。

「……という診断をしたわけなんですが、そこでふと気づいたんです。もしかして私もプロトコル症候群なんじゃないかと」
　男を診察したその心療内科医は、町のさらに大きな心療内科へとやってきた。
「なるほど、つまりプロトコル症候群なのか、それとも自分がプロトコル症候群だからそう判断してしまったのか、その判断がつかないということですか。確かにそれはやっかいですねぇ……。何しろ、その話を聞いて私自身が今、あなたに『プロトコル症候群だ』と判断しようとしています。果たしてそれは、本当にあなたがプロトコル症候群だからなのか、それとも私がプロトコル症候群だからそう判断しようとしているのか……」

錬金術師にできること

　目を覚ますと隣には愛する女性が横たわっていた。自分の口には葦の茎が入ったままで、その先はこの女性の口元へと伸びている。
　彼女は停止したままだった。
「そんな……僕はまた調合に失敗したのか……」
　許しを請う者の谷まで行ってイルビナスサボテンの花弁を集め、天を馳せる者の山の山頂まで行って死者を祀る竜を倒してその逆鱗を剥ぎ取り、地に犇く者の沼まで行って水魔の角を手に入れ、ようやく"再生薬"の材料が揃ったのは彼女が停止して十年後のことだった。
　だが、彼女はまだ停止したままだった。調合は失敗したんだ。
　十年前、街では死眠病と呼ばれる病が大流行していた。僕は人里はなれた場所にいたため感染は免れたものの、彼女はその病にかかってしまった。
　当時はまだ死眠病の治療法が確立されておらず、その名の通り死ぬまで眠り続ける病だった。その後、井戸が汚染されていることが原因ということが判明し、それ以降の流行は防げたものの、すでに彼女は感染したあとだった。

　だから僕は、彼女を停止させた。

　それ以上の病の進行を防ぐために、僕は"停止薬"を彼女に飲ませ、彼女の中の時間を止めた。
　幸い、死眠病の治療薬は他の錬金術師たちによって数年のうちに開発された。彼女もそれによって病自体は治療することができたが、止めた時間を再び動かすための再生薬の準備には苦労した。
　イルビナスサボテンの花弁、死者を祀る竜の逆鱗、地に犇く者の沼に棲む水魔の角。これらを集めるために雇った護衛は数十人はくだらないが、彼らのほとんどが死んだ。
　机の上には僕が最後に読んでいた古文書が開いたままになっている。そのページには再生薬の調合方法と使用方法が書かれていた。

　机の上に大きめの清潔な紙を広げ、僕はその上で花弁を一枚を切り刻み、逆鱗の欠片と水魔の角を削った。乳鉢を手元に手繰り寄せ、それらを混ぜ合わせて丁寧に素材をすりつぶす。真っ白な粉末になった乳鉢の中身を天秤で正しく量り、薬包紙に載せる。彼女の上半身を起こし、気管に入らないようにその粉薬をそっと口に含ませ、少量の綺麗な蒸留水で流し込んだ。
　彼女を目覚めさせるのに失敗したのは、これで三度目だ。しかし何度も古文書を見ているが、ここまでの手順に間違いはない。
　調合方法を間違えたのだろうか。いや、そんなはずはない。あの程度の調合なら素人にだってできる。となるともしかすると時間が経ちすぎて停止薬の効能がなくなったとか……？
　停止薬の材料もまだいくらか残っている。次失敗したら今度は停止薬から作り直そう。彼女が再び動き出すまで、何度でもやってやる。

　僕は彼女の隣に置いたベッドの上に座り、彼女に飲ませた停止薬の残りを一口飲み込んだ。そして最後の手順である『停止する者の最後の吐息』を彼女に送り込むため、葦の茎を口にくわえ反対側を彼女の口に差し込む。
　これでいいはずだ。あとは僕が停止したときに吐く最後の息が彼女に届けばいい。
　徐々に体がだるくなり眠くなってきたため、僕はベッドで横になった。頭がぼんやりとしてくるにつれ、彼女とであったころのことに思いを馳せていた。
　同じ錬金術師として研究するうちに、いつからか彼女のことを好きになっていた。自分を犠牲にして彼女を治療することには理由はいらない。ただ好きだという想いだけで、僕は幸福に満たされる。
　僕は愛する人のことを考え、そっと目を閉じた。彼女が再び目覚め、僕のいない新しい未来へ歩き出してくれれば、それはなんて幸せなことだろうと思った。

　目を覚ますと隣には愛する男性が横たわっていた。自分の口には葦の茎が入ったままで、その先はこの男性の口元へと伸びている。
　彼は停止したままだった。
「そんな……私はまた失敗したのね」

男でも良かった

　俺が綾野を初めて見たのは高校の入学式の日、初登校の途中でのことだった。肩まで伸びた綾野の髪は、風になびく度に煌いて見えた。今になって思えば、おそらくその時点ですでに俺は、後姿に一目惚れしていたんだろう。
　背は俺と同じかやや低いくらいだろうか。この高校は私服オッケーなはずなのに、綾野はきちんと制服を着込んでいた。それがかえって目立ち、俺の目にもとまったのかもしれない。
　早足で追い抜いてみた。なんとなく後ろを見るふりをして顔を確認してみると、そこには艶めく髪に似つかわしい、日本人離れした端麗な面立ちがあった。やべー、まさに俺の理想のタイプ。俺は一瞬で綾野の虜になった。間違いない。これは恋だ。
　入学式が終わり、クラスの振り分け。自分の席が綾野のすぐ真後ろだとわかったときには、まさに運命だと思った。奇跡だと思った。なんて幸運なんだろう。
「はじめまして、綾野って言います。君は？」
　突然、綾野が振り返って言った。綾野は朝シャンしてきたのか、周囲にふわっと花のいい香りが漂った。
「お、俺は沢村。よ、よろしくな」
　やばい、すげードキドキしてる。
「うん、こちらこそよろしく、沢村くん」
　綾野の声は小鳥がさえずるような、という表現がまさにぴったりの、澄んだ声だった。お、俺のことを沢村くんって呼んでくれたのか……？　きっと今、心拍数は千を越えてるに違いない。
　その日から俺は毎日、この美しい髪を見ながら授業を受けることができた。綾野と会えることを思うと、登校するのがうれしくてしょうがなかった。

　綾野は学校から奨学金を貰えるほど成績は優秀だったが、俺はサッカーばっかりやってたせいか中学では成績は良いとは言えず、今の私立高校になんとか入れたのも、単純に間口が広かったからにすぎない。そのおかげでこうして綾野と知り合えたんだからラッキーといえばラッキーだが、綾野に告白するためには、まずは俺は綾野に釣り合う人間にならなくてはならないと思っている。今のままじゃ俺はあまりにも綾野とは不釣合いだ。
　幸いなことに容姿には自信があり、中学時代、レギュラーでもなかった俺目当てに、サッカー部に女子が何人も来たほどだ。まあそういう意味では、見た目というレベルでは釣り合っていると自負している。ならばあとは成績を上げればそれなりに対等になれるんじゃないだろうか。
　そうだ、もし学年で十位以内に入れたら……告白しよう。
　心に決めたその日から俺は、がむしゃらに勉強をするようになった。

　ある日の夕方、ホームルームが終わり帰り支度をしていると、綾野は突然話しかけてきた。
「沢村くん、最近勉強がんばってるね」
「お、おう。俺もそろそろ真面目に勉強しなきゃいけないかなって思ってさ」
　本当は綾野に告白するため、とはとても言えない。
「へぇ、そうなんだ。そうだ、沢村くんって部活はいってないんだよね？　よかったら今日うちにこない？　一緒に勉強しようよ」
　一瞬自分の耳を疑った。学校の外でも綾野と会えるばかりか、一緒に勉強？　それも綾野のうちで？
「あ、ごめん、何か予定……あったかな」
「いや！　なんにもない、いくいく！」
　願ってもないチャンスだった。なんだこの急展開。動揺が顔に出ないように、うんうんと頷いてその場は別れた。

　それからわずか一ヶ月で、俺の成績は驚くべき向上を見せた。綾野の教え方が抜群に上手かったのは言うまでもない。それまで下から数えたほうが早かった成績が、とりあえずは上から数えたほうが早いほどの成績になった。
　綾野と一緒にする予習の効果が如実に現れていた。間違いなくこれは恋の成せる業というやつなのだろう。

　だが一緒に勉強できることもさることながら、綾野が机に向かっているときに垂れた前髪を掻きあげる仕草や、問題集に真剣に取り込むときの知的な横顔、あと勉強するときはメガネをかけていることなど、後ろの席に座っているだけでは見えない顔をいっぱい見られたことがもっとうれしかった。俺はますます綾野のことが好きになっていった。

　そして、次の一ヶ月で、ついに上から十番目の成績になった。

「すごい、たった二ヶ月でこんなに成績が伸びるなんて」
　教室で返ってきた俺の中間テストの結果を見ながら綾野は言った。
「綾野の教え方がいいからだよ」
「本当？　うれしい！」
　綾野が満面の笑みを浮かべる。
　だが、綾野の教え方が上手なのは本当だった。少なくとも今まで出会ったどの教師よりも上手かった。
　それよりも、自分の面倒を見ることで綾野の成績が下がるんじゃないかと心配したが、そんなことはない、相変わらず綾野は俺よりもさらに上の順位についていた。
「やばいなー、これじゃそろそろ追い抜かれちゃうよ。あ、そうだ、今日もうちにくるよね？」
「ああ、いく」
「じゃあさ、今晩両親が旅行にいってていないから、今日うちに泊まっていかない？　たまには遊ぼうよ」
　俺は卒倒しそうになった。
　成績が十位以内になったら告白すると決めて、たった二ヶ月でこんなにも素晴らしい告白のタイミングを作ってくれるとは、神様っていいやつ！　いやいや、これも俺の努力の賜物ってやつ？

　綾野の家の呼び鈴を鳴らすと、入ってと中から返事が来た。早速ドアを開けるとそこには、綾野がエプロン姿で立っていた。
「おかえりなさいませ、ご主人様」
「ぶ……！　な、なにやってんだよ」
「あはは、冗談だよ」
　てかどっからそんな知識仕入れてんだ……。
「いらっしゃい、沢村くん。食材買ってきたからさ、とりあえず一緒に晩御飯作ろう」
　ひとまず俺たちはキッチンに向かい、定番メニュー、カレーの準備に取り掛かった。
　さすがに何の問題もなくカレーはできあがり、程よくご飯も炊き上がった。味も格別で……とこれはきっと、綾野と一緒に作って、一緒に食べてるからなんだろう。というかまるで新婚の夫婦……とか意識した瞬間に顔が赤くなってきやがった。
「ふーくったくった」
　ごまかすように俺は腹をさすった。
「沢村くんすごいねー、ひとりで四回もおかわりしちゃうんだもん」
　そりゃ綾野が作ってくれたものを残すわけにはいかない。というか、体育会系出身としては別に特別無理したわけでもなかったけど。
「将来結婚するなら、やっぱりこれくらいいっぱいご飯食べてくれる人がいいなぁ」
　俺は唾を飲み込んだ。告白するなら、今しかない。
「あ、あの……綾野」
「なに、急にあらたまって」
「お、俺……お前のことが好きだ！　付き合ってくれ！」
　一瞬の沈黙があたりを包んだ後、綾野の顔はとたんに真っ赤になった。
「あ、ありがとう……うれしいよ。でも……」
　綾野は少し俯いた。

「ごめん、急にこんなこと。でも、ずっと好きだったんだ。一目惚れだったんだ。うしろの席になったとき、奇跡だって思った。運命だって思った。勝手な思い込みなのはわかってるけど、でもどうしようもなく好きなんだ。それとも、俺のこと……嫌い？」
　綾野は首を横に振り、こちらを見た。
「好きだよ！　沢村くんのこと。ずっと好きだった。後ろの席に沢村くんがいたせいで、毎日ドキドキしっぱなしだった。でも、いいの？　だって……」綾野はためらいながら言った。「だって、僕、男だよ？」
　俺は何を言っているんだ、と思った。何を今更。
「え？　あ、うん、そんなことわかりきっている。だからいいんじゃないか」
「えっ……？」
　綾野は戸惑った表情を見せた。
「あ、え？」
　俺も戸惑った。もしかして知らなかった……のか！？
「あ、あの、俺、一応、女なんだけど……」
　場の空気が凍るとは、まさにこの状態のことだろう。
「えー！？」

　数十分後、ようやく綾野は落ち着きを取り戻した。
「そりゃまあ、名前が沢村美咲って時点で女かもと気づくべきだったとは思うけど……」
　綾野はとても落ち込んでいる。
「体育の時間だって、俺の着替えてるとこなんて見たことないっしょ」
「あー」
「なんだよ、スカートでもはいてくりゃよかったのか？　でもあれって似合わないし履き心地悪いし嫌なんだよなぁ。だいたい、綾野って名前だって女の子っぽいじゃん」
「それは苗字だし！　僕の下の名前は俊介だもん。勘違いされないよ」
「見た目もかわいいし」
「いやいや、それは制服見ればわかるでしょ」
　綾野の受けたショックは相当なものだったらしいが、自分としては今まで、自分が女だと気づかれていなかったことのほうがショックだった。
「てかさ、初めて会ったときに『沢村くん』って呼ばれて、うれしかったんだぜ？　くん付けで呼んでくれたやつなんて初めてだったから」
「ああ、あれは単純に、本当に男だと思ってたってだけで……」
「まあ、やっぱりそういうことになるか……ん、ちょっとまて、ってことは綾野……」
　すごく嫌なことに気がついてしまった。女の自分にとっては、これは非常にまずい。
「もしかして綾野って……男でも良かったってこと？」
「えっ」
「えっ」

サーバ室

「ごめん、メールの送受信ができなくなったんだけど、見てくれない？」
　社員からの報告を受け、帰宅準備をする社員たちを横目に僕はサーバ室へ向かった。まったく、あと五分で終業時間だってのについてない。本当は明日に回したかったが、明日からはシルバーウィークで五連休だ。その間によその会社からメールが届いたときに受信できていないと困るので、僕は嫌々ながらも復旧に当たらなくてはならない。
　僕は階段を登った。このビルはうちの会社しか入っていない自社ビルで、もう築五十年は経ってるだろうか。四階建てだが、当然エレベーターはない。建物全体が古く痛んでいる雰囲気はあるものの、トイレなんかは改装されて綺麗だし、まあ問題ないレベルだなと入社したのが一年前。僕はＩＴ化担当ということで、社内にパソコンやメール用サーバなんかを設置する、この会社専用のシステムエンジニアとしてここに採用された。自分ひとりだけではあるが、社員数はさほど多くはないため十分やっていける。最近は死語にもなりつつあるが、いわゆる『アットホームな雰囲気』という言葉がぴったりの会社だ。人間関係が問題で以前の会社を辞めた僕にとっては、ここはひどく居心地がいい。
　四階まで階段を登った。サーバ室はその階段の目の前にある。サーバ室の重いドアを押し開けるとそこは、熱帯の楽園……をさらに通り越して、灼熱の地獄へと化していた。恐ろしく暑い空気の塊が顔に触れる。
「あっちぃー！」
　僕は思わず悲鳴を上げた。どうやらクーラーが止まっているらしい。僕は熱風を掻き分けるように中に入り、慌ててクーラーの電源を入れる。念のため未だに起動しているサーバの電源も切った。社員のほとんどが定時で上がるので、もうサーバを全部止めたって問題はないだろう。
　これまでにも何回かこういうことはあった。原因は例えば電源の不具合であったり、メモリのオーバーフローだったりと色々あったが、その度に呼ばれるのはシステム担当である僕だ。
　サーバ周りを触れる人間は社内には僕一人しかおらず、もし僕でもわからないことがあればそれは専門業者に頼むしかない。だが、今回は単純にクーラーが止まっていただけなので、たぶん僕一人でなんとかなるだろう。
　僕はひとまずクーラーが効き始めるのを待つことにした。
　普段サーバ室はガンガンに冷えているため、夏の暑いときはよく涼みにきていた。その上、サーバ室は最上階である四階を丸ごと使っているため、ここへはまず人が来ない。しかも鍵までかかっているため、僕以外の社員は例え来たとしても入れない。さらにこのフロアはなぜか窓を作っておらず、外からも中は見えない。つまり、内側から鍵をしてしまえばまさにそこは自分だけのプライベート空間となり、密室となり、避暑地になり、要するにサボれる場所として有効利用できるというわけだ。
　もっとも、あまり長いこと席を外していると、それはそれで色々と怪しまれてしまうことにはなるが、サーバ障害となれば話は別だ。
　サーバが障害で止まっていたときは、実は電源ボタンを押すかリセットするだけで大抵は直る。まああとはせいぜいログを見て、ハードディスクが壊れてないかとかチェックする程度でいい

。しかもうちほど小さい会社ならサーバの台数もそこまで多くないため、大抵一時間程度で復旧する。でも、復旧にどれくらいかかるかなんてことは社長も含めて恐らく誰もわからない。
　そして、復旧してしまえばあとはこっちのもんだ。それっぽく報告書を書けばそれなりに時間がかかったように装うことができる。
　もしハードディスクが壊れていたら復旧には結構手間取ることにはなるが、幸いなことに今まで壊れていたためしはないし、これからも滅多なことでは起こらないだろう。
　そうやって僕はサボる時間を作るわけだ。社員の行動を監視するサーバを経由しない別のサーバを使えばネットをいくら見ようと絶対にバレないし、なんなら小説読んだりゲームとかしてたっていい。鍵さえかけておけば突然ドアが開くこともない。ただ、ドアをノックされたら開けないといけないので、まあ大音量の音楽をカナル型イヤホンで聴いてたりしない限りはまず何をやっていてもバレない。
　欠点があるとしたら、密閉されているせいで携帯電話の電波も入らないってことくらいだろうか。窓ガラスもなく、唯一の入口も重たい鉄製の扉なせいで、アンテナは完全に圏外。メール一つ送れない。まあ、別にメールをやりとりするような友達もいないから別に構わないと言えば構わないが。
　ああそうだ、冬は寒い、ってのもある。とはいえ冬は厚着していることが多いので、温まることはできないがそれほど寒いというわけでもない。逆に夏場であっても一時間もサーバ室にいれば体は冷え切ってしまうので、上着とか何か羽織るものは必要だ。
　これほど涼しいサーバ室だが、一旦クーラーが止まるとサーバ室はとたんに熱気が充満してしまう。それだけサーバの廃熱はすごい。ほんの二十分も経てば、室温は一気に真夏日の最高気温くらいにはなるだろう。もちろん、放っておけば室温はもっと上がっていく。湿度はないためサウナのように蒸し暑くはならないが、それでもサーバは簡単に止まってしまう。サーバ、というかほとんどのパソコンには温度を測る機能がついていて、一定以上の温度になったときは機械の保護のために自動で停止するように設計されているからだ。
　僕は修理用マニュアルに隠して持ってきた小説を読みながら、室温が下がるのを一時間ほど待っていた。だいぶ冷えてきたため僕はサーバの電源を入れてみる。サーバは次々と起動し始めた。サーバの電源に連動したブラウン管モニタが、ブゥーンという重低音を発しながら起動してくる。真っ黒の背景に白い文字が浮かび上がる。
　全台無事に起動した。障害が出ていないかチェックもしたが、どれにも特に異常はなかった。やはり単純にクーラーが止まったために起こった障害のようだ。熱でハードディスクがやられることは結構あるが、今回は異常がでてすぐサーバ室に来たのが功を奏したらしい。そもそも、なぜクーラーの電源が止まったのかという疑問は残るが、まあこれは連休明けにでもメーカーを呼んで診てもらえばいいだろう。
　あらかたのサーバのチェックを終え、残り一台となったそのときだった。

　ドンドンドンッ！

突然、サーバ室のドアを激しく叩く音が室内に響いた。
「はい」
時間も時間だし、最後の人が見回りに来たのだろうと、僕はドアを開ける。が、そこには誰もいない。目の前にある階段も電灯が消され真っ暗になっている。踊り場にある非常口の緑色灯だけが煌々と光っている。
「今ドア叩いたの誰ですかー？」
僕は闇に向かって叫んだが、返事はない。周囲を見回しても誰もいないし、サーバ室のドアは内側に引くタイプだから、扉の影に隠れるなんて悪戯もここではできない。
と、ここでふと僕は気がついた。廊下が真っ暗ってことはもしかして、もうこのビルには僕以外誰もいないんじゃーー。
僕は焦った。ほとんど毎日、定時で帰っていたため気にしてなかったが、このビルを最後に出る人が廊下や階段の電灯を消すルールになっている。階段の電灯まで消えてるってことは、僕はもう帰ったと思われたのだろうか。もしかすると入口の鍵も閉められたのかもしれない。
ただ……逆にそれはそれでまた怖い。じゃあ今ドア叩いたのは誰だってことになる。
僕は慌ててサーバ室に戻り、帰り支度をした。サーバをログオフし、モニタの電源を切る。
よからぬことを考える前にさっさとこんな場所から逃げだそう、とドアノブに手を伸ばしたときーー。

ドンドンドンッ！

ドアは再び乱暴に打ち鳴らされ、僕はうしろに後ずさった。
一気に動悸が激しくなる。嫌な脂汗が鼻先に滲み出てきた。生唾をごくりと飲み込む音が聞こえた。ドアがへこむのではないかと思うほど、それは強大な力で叩きつける。

ガチャガチャガチャ！

今度はドアノブが回される音が響き、僕はヒャッと声を上げて飛びのいた。
絶対、ドアの外に何かいるーー。

ドンドンドンッ！

音がするたびに動悸は早くなった。これほど寒い部屋なのに、手に汗をかいている。激しく揺れる扉をじっと見ていると、緊張からか吐き気すら覚える。汗が頬を伝い、一瞬で冷える。サーバの出す低い動作音ですら、まるで読経のように聞こえてきて耐えられない。
どう考えてもそこにいるのは、人間ではない存在だ。見えない、というよりも見てはいけない存在。少なくとも生ある者ではない。僕の本能がひしひしとそう訴えている。
唯一の救いは部屋の灯りがまだついていることだった。よくあるホラー映画でならこの次の場

面では大抵灯りが消えて真っ暗になる。真っ暗になったらますますパニックになってただろう。
　鼓動は治まる気配を見せなかったが、明るいおかげで落ち着きは取り戻しつつあった。僕はなんとかここから逃げ出す手段を考えた。そうだ、落ち着け自分。こういうときは冷静に状況を判断しなければ、ホラー映画のように主役が殺されておしまいってストーリーになる。そんなのごめんだ。僕は自分に言い聞かせる。
　そこにいる『何か』はドアを叩いてドアノブを回すが、ドアが開く気配はなかった。扉を開けようとはしないのか、あるいは開けられないのか。
　そもそもさっき廊下を覗いたあとで鍵はかけていない。もし向こうにいるのが人間なら、ドアはもう開いているはずだ。僕を怖がらせるために同僚がやっていたとしても、咄嗟にドアを開けてみたときに誰もいないというのはおかしい。やはりそこにいるのは、人間ではなさそうだ。

　ドンドンドンッ！　ガチャガチャガチャ！

　考えている間もドアは今にも壊れんばかりの勢いで、絶えず打たれ続けていた。ドアを叩く音が部屋中に響く。だが、逃げる方法はどうしても思いつかない。というより、窓も非常口もない以上、どうやってもそのドアをくぐって逃げ出すしかない。
　カバンはまだ二階に置きっぱなしになってるけどそんなことはどうでもいい。とにかくここから、このビルから逃げるんだ。まずは近くのコンビニまで駆け込もう。そこで携帯電話で社長を呼ぼう。
　僕は意を決し、騒音を立て続けるドアに駆け寄り思い切りドアを開いた。僕は考えるよりも早く真っ暗な階段を駆け下りた。目の端で緑色灯が不気味に流れる。転がるように一階に辿り着いた。まだ階上からドアを叩く音がしている。少なくとも『あれ』はまだ上にいるようだ。
　玄関へ向かったが、案の定、外側から鍵がかかっていた。僕は玄関から出ることは諦め、一階の受け付け横にある窓の鍵を開けて外に飛び出した。
　アスファルトの舗装を追われるように走り続けた。コンビニの入口まできて、ようやく僕は安堵することができた。

「佐藤、大丈夫か？」
　コンビニの前で社長の携帯電話に電話をかけると、社長はすぐに駆けつけてくれた。だが、その態度は明らかに何かを知っている。僕が問い詰めると、社長は渋々、事情を教えてくれた。
「昔、あのビルの四階は会社の資料室になっててね、実はあそこで以前、死人がでたんだよ」
　社長の説明はこうだった。
　昔うちの会社に沙希という名前の女子社員がいた。彼女は真面目ではあったが人付き合いが良いタイプというわけでもなく、まあ目立たないけど性格の良い子だったらしい。
　十五年ほど前のある夏の日、沙希は一人で資料を整理していた。夕暮れ時とはいえまだ昼の暑さが残る中、彼女は汗をかきながら一生懸命書類整理をしていた。ところが今日の僕と同じように、まだ社内に彼女がいるにも関わらず、全社員が帰ってしまった。

　このとき悲劇がおきた。彼女は資料を廊下に出して整理していたのだが、その資料が崩れて入口を塞いでしまったというのだ。せめてドアが今と同じように、部屋の内側へ引くタイプだったら、荷物を少しずつでも動かして外に出られたかもしれない。が、当時は今とは逆のタイプだったため、彼女は閉じ込められてしまった。
「しかもさらにタイミングが悪いことに、次の日からみんなお盆休みだったんだよ。ちょうど今日みたいに、明日から連休というタイミングでその悲劇が起こってしまったんだ。沙希ちゃんは五日間、その部屋に閉じ込められることになってしまった」
　僕は言葉を失っていた。
「彼女は何度も扉を叩いて助けを呼んでいたらしいよ。連休明けにようやく彼女は発見されたけど、脱水症状ですでに息絶えていた。彼女は両手から出血して、骨折までしていた。それくらい何度も何度も扉を殴って、そして扉には無数の血の跡が残った」
　僕はひたすら社長の話に耳を傾けていた。そんなひどい事件がこの会社であったなんて。今までこんなこと誰も教えてくれなかったけど、それも当然だと思う。もし知っていたら、サーバ室に行けなくなってただろう。
「それ以来、いつも午後七時ごろになると、資料室、今のサーバ室のある扉をガンガン叩く音がするようになったんだ。だからみんな怖くて六時には帰るようになったんだよ。すまなかったね、君がまだ残ってると知ってたら……」
　社長は謝りっぱなしだった。それにしてもかわいそうな死に方だ。未練を残して幽霊になってしまうのも無理はない。そうか、だから二度とそんな事故が起こらないように、扉がサーバ室側に開くタイプになったのか。
「あっ」そのとき、僕は気がついてしまった。「じゃあ僕が聞いたドアを叩く音って」
　社長は一呼吸置いて、こう言った。
「……そう、あれは彼女が部屋の中から扉を叩く音なんだよ」

　窓を割り、鍵を開ける。男は事務所荒らしだった。今夜もセキュリティの甘い、ある事務所への潜入を見事に果たした。
　サイドバッグから懐中電灯を取り出し、光が外に漏れないように点ける。慎重に周囲を照らしてみると眼前には十畳ほどのフロアが広がり、奥に給湯室があるだけのこじんまりとした事務所だということがわかった。トイレも事務所の中にはなく、少数の社員だけでやっている会社なのだと見て取れた。
≪民間警備会社だらけの世の中で未だに防犯設備を一切置いていないたぁありがたいこった。だが本番はこれからだ。金目のもんがなけりゃ、入ったところで意味はねぇ。まあ今時ノートパソコンでも売りゃ、その日食う分には困らねぇんだが。とはいえこの事務所はホントに何もねぇな。おいおいマジかよ、このご時勢にパソコン一台置いてねぇたどういうことだよ。やべぇなこりゃ、本気で何か探さねぇと≫
　男は事務所を見回してみた。入り口の脇には応接に使うらしい、革張りの豪華な椅子が四脚置いてある。そして入り口正面にあるパーティションの向こう側には、社員用の机が三つ並べてある。だが、肝心の金庫だけは見つからない。
≪金庫が見当たらないってことは、こいつはロッカーに隠してるパターンか？≫
　男は壁際に並べられてあるロッカーを調べてみた。ほとんどのロッカーには鍵がかかっていなかったが、部屋の一番奥の席、おそらく社長席の横にある四台のロッカーだけは開かなかった。
≪ここか！≫
　男はしめしめとほくそ笑んだ。
　さっそくピッキングで開けようとしたとき、男は気がついた。鍵穴がディンプルキーによって開くタイプだったのだ。男が持つピッキングツールでは、ディンプルタイプの鍵は開けられない。
≪くそっ、何でここだけこんなに厳重なんだよ！　いや、だがこんなちっせぇ会社なら、きっと鍵の保管だって適当なはずだ。ここらへんを探してみれば……≫
　社長の机の、一番上の引き出しを開けたとたん、それらしき鍵は見つかった。四つの鍵は、それぞれ違う色のついたシンプルなキーホルダーに繋がっていた。
≪よーしよし。あとは一つずつ合わせていけば……ああん？≫
　男がロッカーの鍵穴に鍵を差し込もうとしたとき、鍵穴の上にシールが張られてあることに気がついた。そこには『橙』という漢字が一文字だけ書かれていた。
≪『橙』……ああ、もしかしてこれか？≫
　男はオレンジ色のキーホルダーがついた鍵を差し込んだ。カチリと音を立てて、鍵が開いた。
≪ははん、なるほどね、そういうこと≫
　難なく開いたロッカーの中を漁ってみるが、書類ばかりで金になりそうなものは何も出てこなかった。
≪くっそ、こんなもんを鍵つきの棚にしまう意味なんてねぇじゃんかよ……次は『桃』か≫

　今度はピンク色のキーホルダーがついた鍵を差し込んだ。再び何の抵抗もなく開錠できた。中の箱を全部開けてみたが、やはり金目のものは出てこない。男は怒り、ロッカーの中身を全部下に払い落とした。
≪く、切れてる場合じゃねぇ。最後は……『草』か。これだな≫
　男は緑色のキーホルダーがついた鍵でロッカーを開いたが、そこもやはり書類ばかりが詰まっていた。
≪かぁーっ！　くそ、しけた会社だ。ついてねぇ。もう今日はやめだやめだ≫
　男は懐中電灯の明かりを消し、鍵を床に叩きつけ、入ってきたときと同じ窓からそそくさと出て行った。

「ほうほう、それで他に何か被害はありますか？」
　刑事に問われ、小さな事務所の社長は恐縮しながら答えた。
「それが……不思議なことに特に何もないようなんです。あ、まあ、窓が割られて、書類をめちゃくちゃにされたってのはあるんですけどね、その程度でして」
「それは不幸中の幸いでしたな。社員の方たちも怪我をされていませんし。犯人と鉢合わせなんかしたりしたら、簡単に殺されてしまうような世の中ですからね」
「ええ、全くです。ですがこれを機にうちでも民間警備会社をいれますかね」
「そうですな、現金数千万も無人の事務所に置いておくのはよろしくありませんな」
「もったいない気がして今まで民間警備会社には入ってなかったんですが、こんなことがあった後ではさすがにねぇ……」
　社長は大きなため息をついた。
「にしても不思議ですな」刑事は水色のキーホルダーを自分の顔の前に垂らした。「なぜ犯人はこの鍵だけ使わなかったんでしょう」
「さあ……現金とか最近買ったばかりのノートパソコンなんかは全部このロッカーの中だったんですけどねぇ。何で犯人はここだけ開けなかったんでしょうか」
　社長は貴重品がたんまりと詰まったロッカーを見た。鍵穴の上には他のロッカーと同じように、漢字が一文字だけ書かれている――『空』と。

廃校の桜

　その日は早朝から霧雨が降っていた。晩秋の雨は冷たく、レインコートを着ていても肌寒さは拭えない。だがそのうち体も温まるだろうと、寝不足でだるい体を押して僕は日課のランニングを始めた。
　遊歩道を渡り、公園のジョギングコースへと向かう。いつもはここを二周するだけなのだが、今日はなぜか無性に別のルートを走りたくなった。まあ、たまにはこういう気まぐれも悪くないだろうと、僕は足の赴くままに走ることにした。
　遊歩道を通り過ぎ、その先の住宅街を横目に走っていた。さすがにこんな朝早くから出歩く人はほとんどいないらしく、すれ違うのは僕と同じように走っている人ばかりだった。
　しばらく走っていると、遠くに中学校があるのが見て取れた。僕が卒業した浅葱中学校だ。そうか、この道はあの中学校に通じていたのか。

　父親の仕事の都合で今の街に転校してきたのは冬休みが終わった直後、中学校を卒業するわずか三ヶ月前のことだった。本音を言えば慣れ親しんだ前の学校で卒業したかったけど、僕は大人の事情というものを察して不平は言わなかった。
　そして今日、僕が三ヶ月しか通わなかったこの中学校は取り壊される。僕たちの年代を最後に廃校となることが決まっていたのだ。少子化の波、なんてものがここにも押し寄せてきていたらしい。残された在校生たちは今年度からは隣の校区の中学校へ通っている。
　たいした思い入れがあるわけではないのに、自分が卒業した学校が壊されるのはうら寂しい。もしかすると、いつもと別のルートを通りたくなったのもこの中学校が僕を呼び寄せたのかもしれないなと思った。
　学校の東門の前まで来た。『あの日』以来しばらくは、深夜までガードマンがいたり門に厳重な鍵がしてあったりしたが、今年度からはそれも一切なくなり、簡単なチェーンがかけられているだけだった。
　僕は中に入ることにした。脇にある花壇を登って裏門を飛び越えると、すぐそばには飼育小屋がある。だが動物たちもすでに別の学校へと引き取られ、掃除しきれなかったエサが独特の匂いを醸し出している。近くの施錠された窓ガラスから中を覗いてみた。ここは理科室だったと思うが、機材も椅子もすっかり運び出されて、水道が備え付けられている据え置き型のテーブルだけが置かれていた。
　学校の正面側にまわってみた。運動場のあるほうだ。今日から取り壊しということだったが、すでにそこら中にブルドーザーなどの重機があった。おそらく前日から準備は始まっていたんだろう。花壇にはビニールシートがかぶせられ、鯉がいた池も今はもう何もいない。
　ショベルカーやダンプカーを避けながら、トラックを一周走ってみることにした。三年生のときにはすでに体育の授業はなかったから、何気にここを走るのも初めてだ。いや、そもそもここに来た時点でもう受験直前だったから、運動場に入ること自体ほとんどなかったように思う。
　トラックを半周走ったとき、プール脇のさらに奥の方で、ふと何かが動いたように見えた。目

を凝らしてよく見てみる。

　――桜だ。

　僕は走るのをやめ、静かにゆっくりと近づいた。
　桜はひっそりと、まるで眠るように佇んでいた。
　そうか、僕を呼び寄せたのはこいつか。ずっと誰にも気づかれることなくここにいたのだろう。この学校が取り壊されることを悟ったんだろう。それで誰かに気がついて欲しくて……。
　すでに季節は秋も終わろうとしている。きっと、新しい出会いに満ちた春を、待ちわびていたに違いないのに、でも、それは叶わなかった。もう二度と、花を咲かせることはできなかった。
　どれだけ寂しかっただろう。どれだけ悲しかっただろう。
「ごめんな、今まで気づいてあげられなくて」
　いつの間にか僕の目には涙が溢れていた。
　突然、どこからか飛んできた淡い桃色の花びらが目の前を横切った。これは、感謝の気持ちなのだろうか。それとも、お別れの挨拶なのだろうか。あるいは、誰かに対する恨みだったのだろうか。
　ただ、どれであったとしても、僕にとっては救いとはならない。彼女に気がつくのがあまりにも遅すぎた。
「安心して。必ず僕が、家に帰してあげるから」
　僕は誓った。せめて、安らかに逝けるように。
　桜は舞うように、ふわりと消えて行った。最後に見た彼女の顔は、優しく微笑んでいるように見えた。

『――続いてのニュースです。本日未明、福岡南署へ『浅葱中学校プール脇の浄化設備に遺体がある』との通報があり、署員が調べたところ、現場から死後数ヶ月経過していると思われる女性の遺体が発見されました。福岡県警の発表によりますとこの遺体は、今年三月に行方不明になった浅葱中学校三年、篠原桜さんとみて身元の確認を急いでいます。現場の状況から警察は、事件事故両方の――』

　朝、会社に来たばかりだというのに、絵里は疲れきっていた。机を拭き、お茶を入れ、コピーをとるだけの一日が今日も始まる。そのことを思うとひどく憂鬱だった。
　会社ではごく稀に、表計算アプリケーションを使ってグラフを作ったり、文書作成ソフトで書類を作ったりはしていたが、とっくにそれらはマスターしており、今ではどれもスキルには結びつかない。本当はもっと、色々なことをやってみたかったのに、仕事らしい仕事はせいぜいコピー機で書類を用意することぐらいしか割り当てられなかった。もちろん、会議ひとつにすら出たことはない。
　もううんざり。
　心の中でそう思うことはあっても、口には出さなかった。
　他に女子社員も居らず、男たちはほとんどが外回りの営業。残っているのは私と数人の上司だけ。そんな奴らに話しかけられても、適当に愛想よく相槌を打って聞き流すだけ。話が合うはずがない。話が弾むわけがない。
　親父たちのどうでもいい会話がうざったくなってきたとき、絵里は女子トイレに逃げていた。誰のためというわけでもないが、化粧を直していればとりあえず気は紛れた。だが、化粧直しで席をはずせるのはせいぜい十五分くらいが限度だ。だから絵里は、どうしても逃げたいときは、資料室へと逃げ込む。
「課長、ちょっと資料室いって資料の整理してますね」
「うん、たのむよ」
　絵里はにっこりと微笑みかけると、そそくさと総務課を出た。
　絵里にはわかっていた。どうせ彼らは私が何をしてようと、たいして興味はないのだ。所詮、安い給料で雇っておけるメイドくらいの感覚でしかないのだろう。これで見た目がよければ会社のアイドルなんて路線もあっただろうけど、そんな器量も私にはない。
　資料室の鍵を開け、中に入るとそこは絵里にとっては楽園だった。誰の目にも留まらず、一人だけで過ごせる。それだけで幸せだった。
　そしてもう一つ、絵里には好きなものがあった。それはファンタジー小説だった。
　廃棄予定のソファーに深々と腰をかけ、隠しておいた小説を手に取った。仕事中、唯一くつろげるのが、小説を読むこの瞬間だった。ソファーはところどころ合皮が破れてはいるが、すわり心地は良かった。
　家から持ってきた缶コーヒーを片手に、絵里はさっそく小説を広げた。

「入るぞ」
　エリアが本を読んでいると、突然扉が開いた。
「ちょっとパパ、いつもノックしてって言ってるじゃない！」

「ああ、すまんすまん」
「パパはいっつもそう。すまんすまんと言ってるけど、全然反省してないし」
「はは、まあいいじゃん。お、またファンタジー小説読んでるのか。薬草学の勉強、ちゃんとやってるのか？」
「薬草学って暗記ばっかりでつまらないんだもん」
　エリアの父はエリアの持っていた本を手に取った。
「パパもはまったなぁ、子供の頃。タイトルは……『ファンタジー小説』？　なんかひねりがないな」
「そのシリーズ、うちの魔専じゃクラスみんなが読んでるんだよ」
　どれどれ、と父親は小説の一ページ目をめくり、音読し始めた。
「朝、会社に来たばかりだというのに、絵里は疲れきっていた。机を拭き、お茶を入れ、コピーをとるだけの……コピー？　って何だ？」
「キカイを使って靭皮紙に書かれたものをそっくりそのまま、別の靭皮紙に書き写すことよ」
　キカイ？　と父親は聞き返した。
「簡単に言えば、靭皮紙にしか使えないレプリケートの呪文みたいなもの」
「ああ、なるほど。面倒なものを使うんだな」
「自分で魔法使わなくても勝手にやってくれるなんて、素敵じゃない！」
　エリアは声を荒げた。
「まあ、そんな考え方もあるか……この、アプリケーションってのは？」
「そのキカイが使う魔法みたいなものかなぁ。説明するの難しいよ」
　父親は本を閉じ、「気分転換はほどほどにしなさい」と言いながら部屋を出た。
「あーあ、行ってみたいなー。こんな魔法のない、ファンタジーな世界」

パパとかくれんぼ

　これは私が六歳のころ、残暑がひどい夏の日にあった話だ。
「優花、いい？　ママとの約束だからね？」
　そういうと母はハンカチを取り出し、汗ばむ私の額から汗をやさしく拭ってくれた。
　母はクローゼットからスーツケースを取り出し、乱雑に衣服や下着などを詰め込み始めた。
　私も母に促され、当時はやっていたアニメのキャラクターがついたリュックサックに、自分の着替えとお気に入りのぬいぐるみを詰め込んだ。
　ぱんぱんに膨れたリュックをリビングまでもっていくと、母はスーツケースをひざで抑えながら「準備できた？」と聞いてきた。
「どこにいくの？」私は尋ねる。
「優花はどこにいきたい？　行きたいところに連れて行ってあげるわよ」
「じゃあ遊園地がいい！」
　何も知らず無邪気だった私は純粋に喜んだ。
　母は私の手を取り、玄関へと向かった。鍵をはずし、ドアノブに手を延ばしたそのときだったーー。

　ガチャ！

　勝手にドアノブが動いたと思った瞬間、ドアが開いた。
「ゆうかぁ」
　咄嗟に母がドアを押さえたため一瞬しか見えなかったが、声の感じからも間違いなく父だとわかった。
「てめぇ、邪魔すんじゃねぇ！」
　父がドアを開けようとしているのを、母が渾身の力でドアを押さえつけている。
「優花、約束したこと覚えてるわよね？　パパが帰ってきたらどうするんだっけ？」
　母は私に問いかけた。
「……かくれんぼ？」
　私は父の挙動におびえながら小声で答えた。
「そう、いい子ね。今はパパが鬼よ。早く隠れなさい」
　私はかかえていたリュックを投げ捨て、ついさっき母から教えてもらったとっておきの場所に隠れた。少し寒かったが、がまんした。
　母の抵抗もむなしく、私が隠れてからドアは十秒ともたなかった。
「あなた、優花のことはあきらめなさい！　このブザーでもう警察には通報したわ！」
「知るか！　……な、離婚届だと？　ふざけやがってこのアマ！」
「やめて！　いや……きゃー！」
　これが最後に聞いた母の声だった。

母の身に何かがあったことは子供ながらに十分理解していたが、それでも私は出て行かなかった。もし父に見つかれば母とは二度と会えなくなると、母から何度も聞かされていたからだ。
しばらく静寂が続いたあとで聞こえてきたのは、ドスンという鈍い音。何かサンドバッグを叩く音にも似ていた気がする。実際には一分にも満たない時間だったのかもしれないが、恐怖に怯えていた私にはそれが何時間も続いているような気さえしていた。
そして、父の声が聞こえた――そう、本当の『かくれんぼ』がはじまった合図だった。

「優花、どこだぁ、ほら、でておいで、遊園地にいこう」
父が部屋を歩き始めたようだ。たかが１ＤＫのマンションの一室で、そんなに隠れる場所があるわけがない。しかし私は母から「ここは安全」と伝えられていたため見つからないという絶対的な自信があった。父は怖かったが、見つかるかもしれないという不安は一切無かった。
私は幼心に、すでにこれがただのかくれんぼではないことを感じ取っていた。見つかれば、必ず良くないことが起きることだけは確信していた。だが何よりも、普段から私や母に暴力を振るう父が怖かった。見つかったら今度は私が殴られる。
「ここか！？」
父が寝室のクローゼットを勢いよく開ける音が聞こえた。
「……いねぇなぁ」
ベッドの下などを見たのだろうか、しばらくガサガサと何かを移動させる音が聞こえた。
「優花ちゃん、どこですかぁ……ゆうかぁ！さっさとでてこいっ！」父の声が怒声に変わった。
「ここかぁ！」
おそらく次に開けたのはトイレのドア。だが私はそこにもいない。
「くそっ、どこにいんだよ、さっさとでてきやがれ！」
次に父は、洗面台のほうへとやってきた。
洗濯機の蓋を開ける音がしたが、当然そんな場所に私が一人ではいられるわけがない。
父は続けて風呂場も覗いたが、半分開いた蓋の隙間から見える残り湯を確認すると、ダイニングキッチンへと向かった。
「鍵がかかってんのかよ……」
窓ガラスを乱暴に殴る音が聞こえた。ベランダからは逃げていないと理解したのだろう。そもそもここは四階だ。当時六歳の私にはベランダ越しに隣家へ渡る手段も度胸もない。
次にキッチンの扉をひとつひとつ開けたが、やはり私はそこにもいなかった。
「まさか冷蔵庫か？　くっそ、いねぇ！　ったく、どこだよ！　さっきまでいただろうが！」
食器棚の食器が次々と割れる音がした。
まさに父は狂っていた。狂気としか例えようがなかった。私の名を叫ぶが、もちろん私は出て行かない。じっとしていれば、私の勝ち。そして母と遊園地に行く。そう固く信じて、私はひたすら耐えた。
「てめぇのせいだ、てめぇが全て、この、くそっ！」
再びあのドスンドスンという鈍い音が聞こえてきた――その時だった。
突然玄関のドアが開き、数人が家の中に入ってくる足音がした。

「警察だ！　動くな！　くっ、遅かったか……おい、六歳くらいの女の子がどこかにいるはずだ、探せ！」
　私が父に勝った瞬間だった。

「救急車！　救急車をもう一台呼んで！」
「どうした！」
「優花ちゃんが、娘の優花ちゃんが見つかりました！　大丈夫？　怪我はない？」
　私は女性の刑事に見つかり、抱えあげられた。
「ママにあいたい」
　私がそう告げると、刑事は困った顔をして答えた。
「ごめんね、ちょっとママは用事で遠くに行っちゃったの」
　母がもう息絶えていたことは薄々感づいていた。刑事を困らせる質問だろうということまでわかっていて、あえて聞いたのだ。当時の私でも何があったのか、子供なりに理解していたのだろう。嫌らしい子供だ。だが、わずか六歳のころの体験だというのにこんなにも詳細をはっきり覚えているのも、やはりあまりにもショッキングな出来事だったからに他ならない。
「……よくこんなところに隠れることを思いついたわね」
　刑事は全身びしょぬれの私を抱え上げ、私にこう聞いてきた。
「うん、ママがね、あそこの中でじっとしてなさいっておしえてくれたの」
　そして私は、水の張っているバスタブを指差した。

　私は今年で十八になり、母方の祖父母と共に、当たり前の女子高生として生活をしている。父は結局精神衰弱として現在も監視付きの警察病院に入院しているが、おそらく二度と私の元へは現れないだろう。
　私がもしあの時、母が教えてくれたあの場所に隠れなければ、きっと今頃は母と同じように殺されていただろうと思う。
　母の絶叫は今でも忘れられないし、おそらく一生忘れることはない。だが、同時に母が私を精一杯守ってくれたことも、私は一生忘れない。そして私が湯船につかる度、当時の記憶は鮮明な映像となって呼び起こされ、これもまた一生消えることはないのだろう。

一億総浄化計画

「本日をもって日本国は、中華人民共和国と併合し『日本自治区』となることをここに宣言します」

　日本最後の首相の最後の一声が国会議事堂に響き、議場に歓声が沸きあがった。いや、日本人最後の一声、と言ったほうが正しいか。
　ついに我々が待ち望んだ日が訪れたのだ。ここまでの道のりは何の困難もなく、実に簡単だった。なにしろ日本人にはリテラシーというものがない。洗練された我々の技術をもってすれば、洗脳するのは赤子の手をひねるようなものだ。
　愚かな日本人たちは『政権交代』やら『生活第一』やら、響の良い言葉に釣られて何の迷いもなく我々の側に投票した。
　嘘だろうが何だろうが、一度与党になってしまえばこちらの勝ちだ。外国人参政権も人権擁護法も夫婦別姓法も、多数決で成立させてしまえば良いのだからな。何しろ与党内には我々の国へ忠誠を誓うような輩が溢れている。
　マニュフェストなんて、聞こえのいいことだけ書いておけば良い。誰がいつ『マニュフェストを守る』とは約束した？　誰がいつ『マニュフェストにないことはやらない』と約束した？　その程度のことも見抜けないのだから、日本人は本当に愚民だとつくづく思う。もっとも、他国が血眼になっていかに自国の利益になるかと考えているときに、日本人の税金を巻き上げてまで他国に朝貢しようとするような奴が首相なのだから、所詮国民もその程度ってことなんだろう。いや、あるいはこれこそが愚民教育を施すための、かの機関の功労なのかもしれない。
　メディアの制圧もここ日本ではありえないほど簡単なことだった。外国籍のまま入社し、もし役職をもらえなければ『外国人差別だ』と声高に叫べばやつらはすぐに平身低頭で役職を差し出す。そうやって役職についた上で、同じように我々の国籍の人間だけを出世させれば、たったこれだけでメディアを制圧できる。実にスマートだ。
　もっともこれは日本人の愚かさが第一条件ではあるが、不思議なことに彼らにとっては、外国人差別は悪であり日本人差別は正義なのだ。他国ではありえない思考だ。これも戦後数十年間に渡り行い続けてきた愚民教育が実を結んだとも言えるだろう。海外では外国籍の人間が排斥されることなど当然のことだというのに、奴らはこの期に及んでもまだ『差別は良くない』などと言っている。未だに差別と区別の違いもついていないんだろうな。実に愚かな民族だ。
　タレント候補も実に役立ってくれた。そいつがどんな思想を持っていて何をしようとしているのかも考えずに、有名だからって理由だけでホイホイと票を入れてくれるのだからな。芸能界はもとより在日外国人や帰化人が多い業界だ。『こちら側』の人間が知名度を得て、日本国籍を持てば、それだけで立派な工作員として成立する。こんな単純なシステムですら、愚民には見抜けない。万が一、深く調べようとする奴がいれば、そのときはレイシズムだと喚き散らす街宣車を家の前まで回せばもうそれで押し黙る。
　しかも芸能人ならともかく、ただのメダリストまで票を集めるのだから笑える。『金メダリス

トは日本の自由と独立を守る思想を持つ人間』とか、冷静に考えれば論理のかけらもないことぐらいわかるだろうに。運動しかしてこなかった人間が、日本の国益なんかを考えて生きてきたわけがないだろう。いや、もしかしてそんなことを本気で考えてるのか？　日本人は頭おかしいんじゃないか？

そしてメディアを支配してしまえば、それこそあとはもうやりたい放題だ。日本人の自由と独立を守ろうとするやつの一挙手一投足全てを非難すればいいのだからな。とはいえ、たかが漢字を読み間違えただけであそこまで人間を非難したのには笑えた。全世界が不況で喘いでいる時期に、日本人はどこまで愚かなのかとはたから見ていても爆笑ものだった。お隣の韓国じゃ成人ですら四人に一人はまともにハングル文字が書けないってのに。この程度のことであそこまで叩けば、キリストだって世紀の極悪人に仕立てられることだろうよ。

だが何よりも決定的だったのはやはり人権擁護法だろう。これのお陰で我々は力を得た。ネット上の言論を封殺し、日本に残された最後の情報入手経路を絶った。与党を批判するような『まともな日本人』は全員この法で捕まえてしまえばいいのだからな。当初予定にはなかった罰則規定も設けたのは正解だった。おかげで数の力で反対派を簡単に押さえつけることができたわけだ。

しかもこの法ちらつかせれば、他の議員ですら引き込むことは実に簡単だった。おかげで外国人参政権を地方から国政に変えるのはすぐだったわけだし。いや、むしろこの人権擁護法が基礎となって、日本を無血侵略できたといっても過言ではないな。

そして最後にきたのが移民法だ。これは国籍法改正よりも手っ取り早かった。日本国内へ二千万人もの移民をさせたことで日本経済が破綻し、ついに我が国の領土となったのだ。二千万人といえばオーストラリアの人口に等しい。その人数をこの狭い日本へ呼び寄せるなど狂気の沙汰としか思えないが、愚かな日本人はここでも何の考えもなしに受け入れた。

景気が悪いときや少子化のときは『経済成長のため、高齢者を支えるために移民が必要』と説き、景気が良いときは「労働力不足を補うために必要」と言って移民を呼びこむ。最初から結果ありきであり、過去何度もそうやって移民必要論を叫んでいたはずなのに、とうとうその矛盾に気づく奴もでてこなかったな。

一部じゃ高齢者を養うための労働力などと言っていたが、ではそうやって受け入れた移民が高齢化したときに彼らを養うのは誰かと言われればやはりそれも移民に頼るしかなくなる。もうこの時点で日本民族自体が滅んでいくようにしかできていない仕組みになっているというのに、愚かな日本人たちはそれすら問題にしなかった。そりゃ滅んで当然だろう。まあそのほとんどが中国の人間だなどと報道するメディアでもあればまた違ったかもしれないが、そんなメディアはもうあの頃にはなかったからな。何しろ、我々が規制をかけて報道させないように弾圧していたのだから報道できるわけがない。

インターネットだけは厄介だったが、中国から借りた検閲システムを導入するだけで簡単に規制ができたから良かった。特定のキーワードでの検索ができないようにした上で、隠語などで真実を書くような奴は人権擁護法で逮捕するだけでいいのだから。そいつに内乱罪を適用して、ひとまず拘束しておくことで彼らは楽に黙らせることができた。死刑は中国併合後にじっくりやれば良い。そして多くの日本人はこれで萎縮した。おかげでインターネットの規制もデモ活動も一

気に抑制することができた。
　まさに愚民様様だな。これほどのことをやれるだけの権限を日本を滅ぼすための組織に渡したのだから。日本人は自ら滅亡を望んだに等しい。
　まあ、とりあえずこれで日本は我々の国の一部となったのだから、あとは簡単だ。チベットやウイグルと同じように、純血の日本人をどんどん滅ぼしていけばいい。日本人同士の結婚には民族差別を助長するという名目で重税を課し、中国と同様に一人っ子政策を推進し、漢民族を『日本自治区』に移住させ、女たちは強制的に首都で働かせ、男たちは肉体労働ばかりを与え早死にさせる。これで完了だ。そのうち自然淘汰されて日本という民族は完全に滅ぶ。
　その上で日本近海の石油やメタンハイドレートを搾取すればいい。何しろそこはもう我々の領土なのだからな。そして徐々に太平洋側へ侵出すれば良い。今日はその記念すべき第一歩なのだ。我々の未来は明るい。

「え？　あそこに行ってきたらブタイにいれてくれるの？」
「ああ、中まで入ることができたらいれてやるぜ。ま、俺らの中じゃまだ誰も成功してねぇけどな」
　ボクは遠くに見える白い建物を見た。そこはとても大きく、とても広い。入り口までいくだけでも大変だ。「わかった、やってみるよ！」
　生まれたときから体が小さかったボクは、仲間たちの『ブタイ』というやつにいれてもらえなかった。そんなボクにやってきた最大のチャンスだ。ボクは気を引き締め、白い建物へとかけだした。

「え、お前マジであそこいってきたのかよ！　マジ勇者じゃん、勇者！」
　ボクは仲間たちの前で自慢げに立ち上がる。今日はいつもとは違う。いつもみたいな見下したような目じゃなく、明らかに『センボウ』のまなざしってやつだ。みんながボクの話を聞きたがっている。それだけでなんだかうれしい。
「ふふ、ボクには何てことなかったね。でも、みんなはやめといたほうがいいと思うよ。目の前に立ち尽くす門番の目をかいくぐって、透明なギロチンを抜けると、そこはひんやりとした空気が張り詰めていた」
「すげぇな！」仲間たちはじっとボクのほうを見ている。こんなに見られるとちょっと恥ずかしいな。
「それでね、中には白色や桃色の服を着た人間がいっぱいいて、ボクを見つけるなり悲鳴を上げたんだ。そう、ヤツらはボクのことを見て怖がったんだよ！」
　仲間たちから歓声が上がった。
「よし、約束どおり、お前は今日から部隊の一員だ。おい、俺の背中に乗れ、アジトを教えてやる！」
　ボクはブタイチョーの背中にぴょんと飛び乗り、振り落とされないように耳をつかんだ。
「おい、いてぇよ、耳はやめろ。持つなら首んとこの毛を持て！」
「うん、ごめん」
「うんじゃねぇ、部隊では『ラジャー』と言え！」
「ラジャー！」
　ボクは両手で黒い毛の束をがっしりと掴み、誇らしげにしっぽをピンと立てた。

「先生……ネコイラズでもまいておきましょうか」
「いや、本格的にネズミ駆除会社に頼んだほうがいい。どんな病原菌を持ち込まれたかわからんからな。衛生に金を出し惜しんではいけない。それに病院にネズミが入ったことが広まる前にこれでもかってくらいに対策をとっておかなくては、信用問題にもなりかねないからな」
「わかりました。そういえば先日はネズミじゃなくて黒猫が玄関の前にいましてね、患者さんた

ちからは不吉だって声もあがって……」

願いの正しい伝え方

　男はほろ酔い気分で、小雨の降る公園を歩いていた。ところどころに街頭があるが、夜も遅く人影はまったく見えない。
　すると突然後ろから声がした。いや正確には後頭部のもう少し上の方から声がした。
「おい、お前。お前だよ。そう、お前だ」
　男が振り向くと目線よりもやや上空に、黒い物体が浮かんでいた。
「うわ、な、なんだ」
　男は驚き、後ずさった。
　その黒い物体には黒いコウモリのような翼があり、黒い尻尾のようなものがゆらゆらと揺らめいている。頭には赤く光る眼と禍々しくねじれた二本の角があり、男が『悪魔』として知る姿そのものだった。
「ひ、ひゃぁ」
「まてまて、何もビビるこたぁねぇ。俺はお前の願いを叶えに来てやったんだ」
　腰が抜け、四つん這いになった男を悪魔は引き留めた。
「ひゃ、ね、願い？」
「ああそうだ。願いを叶えてやる。もちろんタダってわけにゃぁいかねぇ」悪魔はニヤリと笑った。「お前が死んだらその魂をいただく」
「た、魂……ああ、これは夢か……！？」
「夢じゃねぇよ。ま、夢だと思いてぇならそれでもいいけどさ、俺はお前の願いを叶えるって言ってんだ」
　そんなに酒を飲んだ記憶もなく、男の意識ははっきりとしていた。
「あ、ああ、わかった。俺は酔っちゃいない。現実だ……現実だ。お、お前は、あ、悪魔なのか……？」
「ああ、悪魔だな。お前ら人間の定義からすれば」
「そ、そうか、わかった」
　男は次第に冷静さを取り戻していった。
　今まで天国も地獄もその存在を信じず男は生きてきた。だが、悪魔を目の前にしてそれは確実に存在することを確信し、そして地獄へ落ちることを生まれて初めて恐怖した。
「やっぱり魂を取られると地獄に落ちるのか？」
「落ちつけ。確かに天国には行けなくなる。だが同時に地獄に行くこともなくなる。お前、今までの人生振り返ってみて天国にいけるようなことをしてきたか？　してねぇだろう？　俺様はちゃんと知ってんだよ」
　悪魔は宙に浮きながら、見透かすように男に告げた。
「だがてめぇは今死ねば間違いなく地獄に堕ちる。だからお前にとっちゃ悪魔に魂を持ってかれたほうが得ってこった」
「俺が……地獄に」

「ああ、そういうことだ。……あ！　お前、病気でもう先が長くねぇな？」
「あ、ああ、肝臓が……」
　半年前、男は余命一年と医者から宣告されていた。肝臓ガンだった。
　幸い他には転移していなかったため、臓器移植すれば治療できることはわかっていたが、男にはその手術を受ける金がない。今日もまた世の中の不公平さを愚痴りながら、安酒をあおって帰るところだった。
　もちろん、酒が肝臓に最も悪いことは承知の上だった。だが、どうせ一年生きられるのが半年になったところで大差ない。そう思い男はいつも好きなだけ酒を飲んでいた。
「ならなおさらラッキーじゃねぇか。魂をいただくのはお前が死んでからの話だ。人間の数十年なんて俺らにとっちゃ一瞬だからな。病気を治せって俺に頼めば人間の寿命くれぇはまっとうできんじゃねぇの？　ほら、さっさと契約しようぜ」
「なに、死んでからでいいのか！　だが……なんで悪魔は魂を欲しがるんだ。ってか欲しいものは勝手に持っていくのが悪魔ってもんじゃないのかよ」
「悪魔にだって契約ってもんがあんだよ。正当な対価なしにはむやみに魂を奪うことはできねぇ。世界のバランスが崩れるんだ。ちなみにてめぇの魂は悪の限りを尽くした極上もんだ。だから俺は、てめぇの願いを三つ叶えてやる。三つもだぞ？」
　男はそれまで、悪徳の限りを尽くして生きてきた。人を騙し、誑かし、殴り、そして殺してきた。罪を犯しては町を転々と渡り歩き、結局一度も捕まらず、罪を償うこともせずに生きてきた。そして、死に場所として故郷であるこの港町へと戻ってきたのだ。
　確かに、自分の今までの行動は悪魔そのものだったかもしれないと男は考えた。だが、その行為に対して罪悪感を抱いたことは一度もない。
「は、はは、そうだな。どうせ天国に行けないなら、死ぬまでに現世を楽しみたい」
「おう、そうだそうだ。しっかり楽しみな。じゃあこれで契約完了だ。さてと、まずは何の願いを叶えたい」
「そうだな、病気は金さえあれば治りそうだから、まずは金だ。一生遊んで暮らせるくらい、たくさんの金が欲しい」
「よしきた」
　悪魔は鷹のような鋭い爪でくるりと円を書くと、上空から数十束の札束が降ってきた。
「え、なんだよ、こんだけかよ？！　ああ、なくなったらまたあとからくれるんだよな？」
「いや、そんだけだ。『一生遊んで暮らせるくらい』って言ったじゃねぇか。てめぇの一生はあと二十日と五時間ってとこだ。しかもその一週間前からは倒れて昏睡状態になるから遊ぶ必要はねぇことになってる。だからそんだけありゃ死ぬまで遊んで暮らせるぞ」
「くそ、騙しやがったな！」
　男は悪魔に殴りかかったが、空気を殴るように拳は悪魔を貫通した。よく見ると雨も悪魔には当たっていない。
「おっと、俺様は悪魔だ。人間ごときが殴れるわけねぇだろ。だいたい、願いを叶えるのは俺の仕事じゃねぇよ。てめぇの言い方が悪ぃんだろうが。ほら、さっさと次の願い言えよ」

「仕事じゃねぇって悪魔のくせに分業制なのかよ……。よし、いいだろう、じゃあ次の願いは『世界中の富を俺のもとに』だ。これでどうだ」
「大きくでたねぇ。だがオッケーだ、受理された。とりあえずお前、逃げろ。今からここに世界中の富が降ってくるぞ。別にお前が今死んだって魂を頂く権利はあるんだが、これはあくまで俺様の好意で忠告してやってんだ。感謝しな」
「逃げろって……何言ってんだ？」
「上を見てみな」
「へ？」男が上空を見上げた瞬間、頭をかすめるように金色の何かが墜落した。「何だこれ……ツ、ツタンカーメン！？」
「こりゃ時間かかるな。続きは明日にすっか」

　公園にはダイヤモンドや紫水晶といった宝石のみならず、中世ヨーロッパの刀剣から鉄の巨大な仏像まで、ありとあらゆる財宝が男のいた公園を目がけて降り注いだ。
　それは次の日の朝まで降り続き、そしてこの港町は政府の監視下へ置かれることとなった。

「おい、何なんだよこれ！」
　男は町から少し離れた丘の上にいた。同じように避難してきた町の人たちで周囲は混雑していた。眼下に見下ろす故郷はすでに財宝で埋め尽くされ、建物の影すらもはや見えない。上空には何台ものヘリコプターが旋回し、この異常現象を世界中へ配信している。
　町へ戻ろうにもすでに軍隊が町を包囲しており、ネズミ一匹通してくれそうにはない。
「なんだよ、また文句かよ。願いどおりじゃねぇか。世界中の富がお前のいた場所に降り注いだぞ」
「俺は所有権の話をしたんだよ！　もうあの町に戻れなくなったじゃないか！」
　港町は朝日に照らされ、ありとあらゆる宝石がその光を反射している。まさに町全体が光り輝いていた。
「ならそう言うべきだったな。俺の知ったこっちゃねぇよ。んで、最後の願いはどうするよ」
「くっそ……ああ、そうかい、わかったわかった。ふ、じゃあこれならどうだ。俺を永遠に生かせ！　はっはっは、これで俺は不老不死だ。魂はお前には渡さない！」
「……いいだろう。その願いも受理された」
　そう言うと悪魔は男の手をつかみ、男を空へ持ちあげた。
「な、おい、どこへ行くんだ」
「……地獄さ。生きたまま、極限の苦痛を味わいながらもお前は決して死なない。しかもいくら魂を吸い取ったって死なねぇからいくらでも拷問にかけ続けることができる。なにせ、生きている人間を拷問にかけてはいけないなんて規則は悪魔にはないからな。人間の味わう苦痛ってのは悪魔にとっちゃごちそうなのさ。実に素晴らしいね！」
「ひ、や、やめろ！」
「おっと、願いは三つだって言っただろう？　お前のその強欲な心は本当に素晴らしい。これ以

上ねぇほどの極上もんだ。俺たち悪魔は人間から永遠に命を吸い取り続けるために不老不死を願った愚かな魂を集めているのさ。対価がなきゃ世界のバランスが崩れるって言っただろう？　生きた人間を拷問にかければそのバランスがくずれるのさ。だが永遠の命を持つのなら別だ。つまりこれから起こる苦痛は永遠の命を得る対価さ。世界が永遠の命を許容するためには、苦痛を与え続けることでしかバランスは保てねぇ。永遠の命を得ることはそれくらい大きな対価が必要なのさ。さてさて、まずはどんな拷問にかけようかねぇ……ヒッヒッヒ」

悪魔が指で空をひとかきすると、突然目の前に大きな漆黒の穴が生まれた。悪魔は男をその穴へと引きずりこんだ。

男は絶叫したが、その声は闇に消され、誰にも届くことはなかった。

プロトコル症候群

http://p.booklog.jp/book/1747

著者：森野クマ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/wiwiroon/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/1747

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/1747

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ